

論文

副詞表現の認知的意味機能 「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」

山 本 雅 子

要 旨

本研究は、文法形式という独立した抽象的な記号とみなされていた副詞および副詞的表現を、認知言語学のパラダイムにおいて、外部世界との相互作用に基づく言語主体の身体化の観点から統一的な説明を試みようとする研究の一環である。本稿では、「もう」「まだ」「ついに」「とうとう」は、四者とも、これまでの認知言語学の研究成果から、汎用性が高く基本的な認知モデルとみなされている、起点・経路・到達点スキーマに動機づけられていることを説明する。同質のスキーマに動機づけられながら、それぞれの言語形式が異なった意味機能を見せるのは、スキーマ自体の作用の仕方の異なり、および、スキーマ構成要素のそれぞれが指示する対象や、焦点化される部分の異なりの反映に依るものである。

キーワード： 起点・経路・到達点スキーマ，参照点構造，図と地

1. はじめに

言語の意味機能についての研究を品詞別に見た場合、極端に研究が進んでいない分野の一つが副詞および副詞相当表現の意味機能についてであることは周知のことである。そしてこの現象はひとり日本語に限ったことではなく、多くの言語に見られることもよく知られているところである。では、何故とりわけこの分野の研究が遅々として進んでいないの

だろうか。

その理由は、これまでの言語研究が言語の形式と意味の分類に終始するスタティックで後付的な知識の記述を目的としており、言葉を言語主体のメンタル・プロセスとの観点から捉えようとする研究ではなかったことにある。副詞および副詞相当表現のように明らかに言語主体の認識態度を表す表現については、従来の研究姿勢ではその意味を解明することは困難であり、実際試みたとしても統一的な研究成果は出せず、結果、研究がなかなか進まなかったものと考えられる。このような研究の遅れは、たとえば、辞書の意味記述からも明らかである。辞書を引いてみると、1つの副詞および副詞表現の意味の記述に別の副詞および副詞表現が記載されており、そこで、その記載されている副詞を引くと、たんに先の副詞が記載されているのみであるということは、おそらく誰もが経験したことがあるだろう。要するに、副詞および副詞表現の意味は、それらを文法形式という独立した抽象的な記号とみなしている限り解明され得ないものなのである。

本稿では、これまで、文法形式という独立した抽象的な記号とみなされていた副詞および副詞的表現を、認知言語学のパラダイムにおいて、外部世界との相互作用に基づく言語主体の身体化の観点から統一的な説明を試みる研究の一環として、「まだ」「もう」「ついに」「とうとう」について考える。「言語主体」という要因を不可欠とする認知言語学のアプローチでは、「空間認知、感覚・運動的な経験をはじめとする身体性の問題を重視する。言葉は、空間認知、感覚・運動的な経験、主体と環境との相互作用を反映するさまざまな要因によって身体化されている。われわれは、外部世界を客観的に意味づけているのではなく、感覚・運動的な経験、空間認知をはじめとする外部世界との相互作用にもとづく具体的な経験を通して世界を意味づけている。この種の意味づけ能力は、言語の形式と意味にさまざまなかたちで反映されている」(山梨 2001:3)とみなされる。このような認知言語学の立場にたてば、あらゆる言語形式の背後に、言語主体の十分な動機づけと秩序が横たわっていると想定することは容易である。

手続きは以下のようなものである。まず、2節では、3、4節での言語分析のツールとなる認知モデルを概観する。ついで、3節で「まだ」「もう」の意味機能を、イメージスキーマの一つである起点・経路・到達点スキーマを用いて説明する。この起点・経路・到達点スキーマは、これまでの認知言語学の研究から実に汎用性の高いスキーマであることが実証されているものである。そして最後に、このスキーマが、「まだ」「もう」のみならず、「ついに」「とうとう」の副詞表現の動機づけにもなっていることを4節で説明する。

2. 認知モデル

われわれは、日々、われわれの身体経験に基づく多様な認知モデルを介して外部世界を理解しているのであるが、これらのモデルの機能は、言葉の形式や意味のさまざまな側面に反映されている。本節では、次節以降で分析対象とする副詞表現の形式と意味の動機づけに貢献する認知モデルを概観する。

2-1 図と地

(1) 図地分化

われわれがある対象を認知する場合には、その対象を際立った部分とそうではない部分とに区分し、前者を焦点化して認知していく。この焦点化された際立った部分は図、その背景になっている部分は地とみなされる。このように知覚した対象を図と地に振り分けることを図地分化という。図地分化は、人間の知覚にとって基本的な認知能力で、知覚のレベルにとどまらず、より高次のレベルでも保持される。山梨(1995:14)では、図と地の区分と言語表現の認知的側面との関係を次のように説明している。

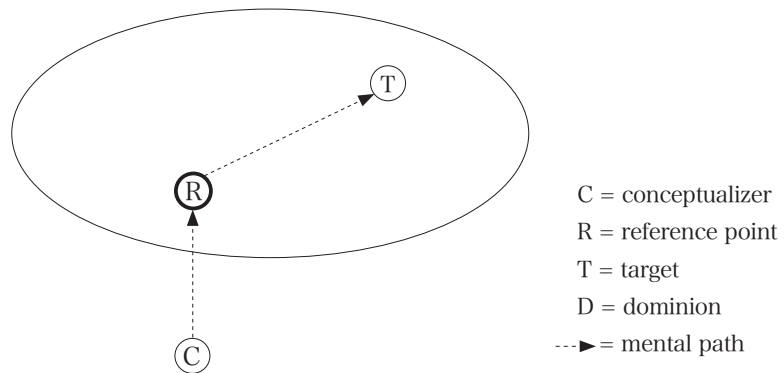
- (i) 新情報を構成する部分は図、旧情報を構成する部分は地
- (ii) 断定されている部分は図、前提とされている部分は地
- (iii) ある存在の位置づけにかかわる場所ないし空間は地、そこに位置づけられる存在は図
- (iv) 移動する存在を表現する部分は図、その背景になる部分は地
- (v) 省略されている部分は地、記号化されている部分は図

(2) 図地反転

知覚した対象の図と地の役割が逆転することを図地反転という。ルビンの杯として知られる図形において、黒い部分を図とすることによって杯が知覚され、白い部分を図とすることによって向き合った顔が知覚されることはよく知られている。この認知現象が図地反転であり、その意味するところは、客観的に同一の対象の前景と背景を反転させることによって、異なる価値が生じることにある。

2-2 参照点とターゲットの探求プロセス

一般に、われわれが何かをターゲットとして探求する場合、そのターゲットに到達するためには参照点（すなわち、ターゲットに到達するための指標としての間接的な手がかり）を認知し、この参照点を経由して、問題のターゲットとしての対象を認知していく。この種のプロセスは、基本的に図1のように規定される (Langacker (1993:6))



(図1)

Cは認知主体 (conceptualizer), Rは参照点 (reference point), Tはターゲット (target), 楕円形のサークル (D) は、参照点によって限定されるターゲットの支配領域 (dominion), 破線の矢印 (---▶) は、認知主体が参照点を経由してターゲットに到達していくメンタル・パス (mental path) を示す。参照点とターゲットの認知プロセス自体は、言葉の問題ではなく、認知能力にかかわる問題であるが、この種の認知プロセスは、日常言語の伝達のプロセスや言葉の理解のプロセスにさまざまな形で反映されている。

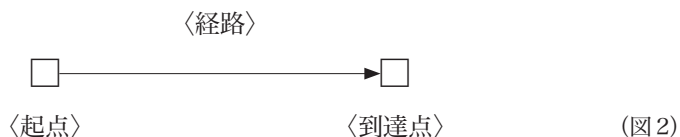
2-3 起点・経路・到達点スキーマ

(1) イメージスキーマ

言葉の形成と概念化に先だって存在する心的表象に関わる認知能力の1つにイメージ・スキーマがある。我々は、意識するかしないかに関わらず、日々、具体的な身体経験に基づいて様々なイメージをつくりあげ、このイメージを介して対象の理解を試みる。しかし、人間の認知能力は、具体的なイメージを作り上げていくだけでなく、このイメージに関わる具体的な知識を背景にして、抽象的なイメージスキーマを作り上げており、それらは一般的な認知枠としてはたらいっている。イメージスキーマは、日常言語の形式と意味の拡張、生成を可能とする人間の認知能力の背景として重要な機能を担っており、言葉の形式と意味は、外部世界の知覚、経験を基盤とするさまざまなイメージスキーマによって動機づけられている。

(2) 起点・経路・到達点スキーマ

これまでの認知言語学の研究成果として、さまざまなイメージスキーマの存在が明らかにされている。そのなかにマーク・ジョンソン (Johnson 1987) で提唱された「起点・経路・到達点スキーマ」がある。空間的に〈起点〉と〈到達点〉を結んだ中間部を〈経路〉とするもので、(図2) で表される。



もともとのスキーマは空間認知を反映させたもので、典型的には「移動」の現象を表すが、次に示すように汎用性の高いスキーマとして知られている。空間的な「移動」から「変化」への隠喩的写像。また、抽象化が進んで、「因果関係」への拡張。さらには、日常言語の推論に関わる認知プロセスの基盤を構成するイメージ・スキーマとしてはたらくことも説明されている（山梨 2004:27）。

2-4 視線のベクトル

①「オリーブの木の横にレモンの木がある。」と②「レモンの木の横にオリーブの木がある。」という表現は、外部世界の同一の状況を叙述している。しかし、認知的な観点からいうと、これらの表現の意味することは異なる。どちらの表現が使われるかにより、表現主体の視座が決定されるのである。①では、表現主体はまずオリーブの木に視点を据え、次いでレモンの木へと視線を移動させている。一方、②では、レモンの木に視点を据え、次いでオリーブの木へと視線が移動しているのである。①②では、表現主体の視座の取り方とそこからの視線の移動の軌跡のちがいによって、外部世界の同一の状況が異なった形で叙述されているのであるが、この視線の移動方向を視線のベクトルという。

2-5 ビリヤードモデル

ビリヤードモデルとは、外部世界の事態をエネルギー伝達の観点から認知的に理想化して捉えるモデルの一つである。ビリヤードというゲームでは、ボールが相互連鎖的にエネルギーを伝えあう。これと同じように、事態の参加者をボールとみなし、参加者間の関係をビリヤードにたとえてエネルギー伝達の観点から理解しようとするモデルである (Langacker 1991 参照)。

2-6 まとめ

以上、今後の分析に役立つ認知モデルについて説明してきた。これらすべての認知モデルに共通していえることは、それぞれのモデルは、少なくとも次のような能力が関わって形成されているとされていることにある。

- ・ある対象にたいし具体的なイメージを作り上げる能力

- ・ある対象のイメージを他の対象に拡張していく能力
- ・ある対象のイメージを多角的な視野から組みかえる能力
- ・ある対象と他の対象の間に類似性を認識する能力
- ・ある対象と近接関係にある対象を関連づける能力 (山梨 1995:4)

このようなダイナミックな認識作用のはたらきが、言葉の形式や意味のさまざまな側面に反映されているのであり、換言すれば、言葉の形式と意味は、認知モデルによって動機づけられているのである。次節ではその動機づけの実際を見ていく。

3. 「まだ」と「もう」の意味機能

辞書に記載されている「まだ」と「もう」の意味はそれぞれに実に多様である。このような多様性は、文脈が必然的に当該の言語構造の解釈のあり方に影響を与え、一つの言語形式がさまざまな意味機能を呈することを意味するものであり、当該の言語構造が多義性の構造をなしていることのあらわれである。ここでは、従来、無秩序としかみられなかった多義間の意味相互のつながりを言語主体の動機づけの観点から統一的に説明する。

3-1 「まだ」

「まだ」の意味は、『日本国語大辞典第二版』(p.410, 小学館)では以下のように記述されている。

まだ【未】一〔副〕(いまだ(未)の変化した語)

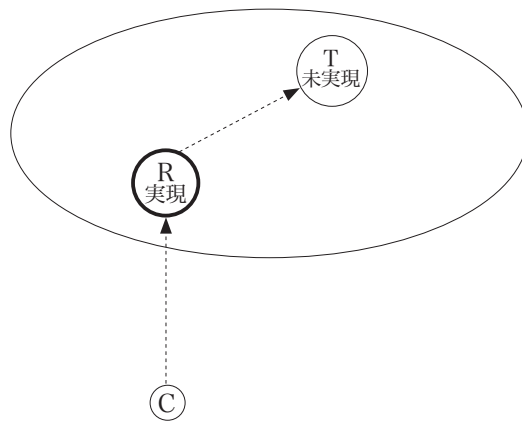
- ① 否定語を伴って、一つの事態がその時点までになお実現していないさまを表す。
- ② 肯定表現に用いて、一つの状態がその時点において、なお継続するさまを表す。
- ③ 特に、時と共に経過・発展・成長することを予想される事柄について、一つの状態がなお持続しているさま、なお十分に経過・成長していないさまを表す。
- ④ 事態がさらに悪くなる状態を想定して、もっと悪い状態と比べて、なおとるに足ると判断されるさまを表す。
- ⑤ 一つの事物・事態の状態が、他の事物・事態の状態よりも、さらに一段と程度の進んださまを表す。

上記の意味記述からは、時間要素の有無、時点との関わりにおけるアспект、程度の関与、主観的判断の関与等がばらばらに記述されており、多義性の様相が露わである。以

下では、それぞれに該当する例文を挙げ（『現代副詞用語辞典』1994 東京堂出版より抜粋）、これらの意味の統一的説明を試みる。

- ① さっきから待っているのに、彼女はまだ来ない。
- ② 「雨やんだ?」「まだ降ってるよ。」
- ③ 彼女はいい年なのにまだ独りだ。
- ④ 英語の点は国語よりまだましだった。
- ⑤ 「今日はずいぶん寒いね。」「二月に入るとまだ寒くなるよ。」

まず、「まだ」の一義となっている ①「さっきから待っているのに、彼女はまだ来ない。」の文例を用いて考える。この例文からは、一見すると、「彼女はまだ来ない」という表現は、たんに、「彼女が来る」という事態の実現を想定している話者が、〈事態実現の確定〉を参照点 (R)、〈事態未実現の確定〉をターゲット (T) とする、参照点とターゲットの探求プロセスとして、言語主体が事態を捉えていることを表しているように見える。

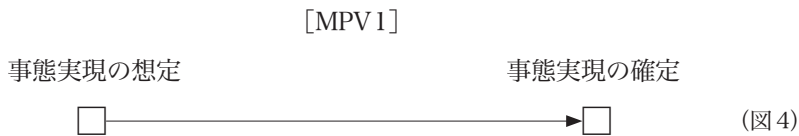


(図3)

たしかに、この文例が意味する事態と話者の関係は、二者の関係として捉えれば参照点とターゲットの関係にあることは否定できない。しかし、たんに二者間の関係を表すことだけを意味するのであれば、「まだ」という形式を付加する必要ななく、「彼女は来ない」とすればよい。ある環境の中にある言語形式が存在するということは、必ずやその形式の意味機能がそこに存在するということである。したがって、「まだ」という形式が付加されているということは、参照点とターゲットの関係にさらに何かを加えた言語主体の意識がはたらいっていることを意味するものであり、その意識のはたらきこそが「まだ」の意味機能を動機づけているのである。以下では、「まだ」を動機づける意識のはたらきを順を追っ

て説明する。

「まだ」を動機づけるのは、事態実現の想定地点を起点、事態実現の確定地点を到達点、その過程を移動するメンタルパスを経路とする、起点・経路・到達点スキームである。このスキームは、事態の実現を想定した話者が、想定地点から継続的に事態実現の確定へとメンタルパスを移動させる認知態度を示す。「まだ」の動機づけとしてこのスキームが実働する際にはメンタルパスのベクトルが二種類の方角へと向かう。まず、ベクトルは起点から到達点へと向かう。これを [Mental Perspective Vector: MPV1] とする (図4)。



話者のメンタルパスはMPV1においていったんは到達点に達するものの、そこでは事態実現は確定され得ない。そこで、事態実現の確定地点を折り返し地点として、メンタルパスのベクトルが反対方向に向き、経路の途上にある話者の地点が指示される。これを [MPV2] とする (図5)。MPV2はMPV1を背景にして、MPV1の経路の一部を際立たせ、経路の途上にある話者の地点を指示しているのである。つまり、MPV1とMPV2は図と地の関係にある¹⁾。



さらに、図と地の関係は、MPV2の内部においても発生する。起点・経路・到達点スキームでは、前節に挙げた図と地の関係 (i) - (iv) から明らかなように到達点が焦点化されるのが一般である。しかし、このような図と地の関係は絶対的なものではなく、どの部分が焦点化の対象となるかは文脈や状況との関連で相対的に決められるものである。「まだ」ではMPV2の事態実現の確定地点から話者の地点を指示する「経路」が焦点化され、図と地になって浮き彫りにされていることが以下の理由から説明される。

「まだ」を動機づける認知モデルは、起点・経路・到達点という三種類の要素から成るスキームであるが、このスキームは、参照点とターゲットの探求プロセスの観点から捉えれば、参照点とターゲットに経路であるメンタルパスを加えたものであるとみなすことが可能である。したがって、このように考えると、図3で見た「参照点とターゲットの関係に

何か別の意識を加味する」とする「まだ」の意味機能の「別の意識」の実体がメンタルパスであると判明する。メンタルパスの移動こそが「まだ」の意味を直接動機づけているのであり、このことから、MPV2が実際にはたらく場合には、経路が焦点化されるのが前提となる。

この前提に加え、共起する言語表現がさらなる際立ち部分を明示する。つまり、環境によってはMPV2を構成する三要素の経路以外の要素も焦点化され得るのである。話者の地点か、事態実現の確定地点かが焦点化される可能性があるのだが、そのどちらが選ばれるかによって様々な表現が可能となり、このことが「まだ」に多義の見えをもたらす。以下では、「まだ」スキーマの実際のはたらきを説明することにより、経路以外の要素が実際にどのように焦点化されるかを示す。

(1) 話者の地点の焦点化

①「まだ来ない」では、否定形式が用いられていることから話者の地点から事態に対する話者の判断が提示されており、話者の地点が焦点化されている。「来る」事態の想起地点を起点とし、「来る」事態の実現確定地点である到達点へ向けてのベクトル移動MPV1に続き、実現確定地点から経路上の一地点である話者の地点に向けたMPV2がはたらき、MPV2の最終地点が焦点化されているのである。このような話者の地点の焦点化は否定形式には限らず、②「まだ降っている」、③「まだ独りだ」も同様である。②の「まだ」では、「雨が止む」事態の想起地点を起点とし、「雨が止む」事態の実現確定地点である到達点へ向けてのベクトル移動MPV1に続き、「雨が止む」事態の実現確定地点からMPV1の経路上の一地点にある話者の地点に向けたMPV2がはたらく。そして、話者の地点の状況である「雨が降る」事態の実現が、テイル形式によって話者と同位置で確定²⁾されている。③では、「結婚する」事態の想起地点を起点とし、「結婚する」事態の実現確定地点へ向けてのベクトル移動MPV1に続き、「結婚する」事態の実現確定地点からMPV1の経路上の一地点へのベクトルMPV2がはたらき、最終地点にある話者の地点から判断した「独りである」事態の実現が、ダ形式によって話者と同位置で確定²⁾されている。

(2) 事態実現の確定地点と話者の地点の焦点化

②「まだましだった」では、ベクトルが転換する地点である事態実現の確定地点と話者の地点が同時に焦点化され、両者の比較対照結果が話者の地点からの判断として表現されている。「低い評価が出る」事態の想起地点を起点、「低い評価が出る」事態の実現確定地点を到達点、実現確定地点へ向けてのメンタルパスを経路とする起点・経路・到達点スキーマのMPV1に続き、MPV2がはたらく。このスキーマで特徴的なことは、経路に高から低への傾斜値が付加されていることである。想起および実現の対象となる事態はともに「低い評価がでる」という事態であるが、MPV1のメンタルパスは「低」の中でも「高」

とみなせる程度から極めての「低」へと移動する。後者は最悪の事態の実現と見なしても良いだろう。このようなMPV1でのメンタルパス移動に続き、MPV2のメンタルパス移動がはたらく。MPV2での事態実現の確定地点と話者の地点が同時に焦点化され、低いながら話者の地点の方が事態実現の確定地点より高い評価であったことの判断が「ましだった」で言語化されている。

(3) 事態実現の確定地点の焦点化

⑤「まだ寒くなる」の「まだ」では、「寒くなる」事態の想起地点を起点、「寒くなる」事態の実現確定を到達点、実現確定地点へ向けてのメンタルパスを経路（ここでの経路にも④同様、高から低への傾斜値（ここでは温度差）が付加されている）とする起点・経路・到達点スキーマのMPV1に続いてMPV2がはたらき、話者の地点が指示される。ここまではこれまで述べてきた認知プロセスと同じだが、⑤の場合はこの後さらにメンタルパスの移動が起こる。MPV2の話者の地点が指示された後、もう一度ベクトル転換操作が起こり、話者の地点から再度、事態実現確定地点へとベクトルが向けられ事態実現確定地点が焦点化される。この焦点化が話者の地点からの変化実現を確定する表現である「なる」で言語化されているのである。つまり、このような事態実現の確定地点の焦点化の場合には、ベクトル操作の三連鎖が生じているのである。

3-2 「もう」

「もう」の意味は、『日本国語大辞典第二版』（p.410, 小学館）では以下のように記述されている。

もう [副]

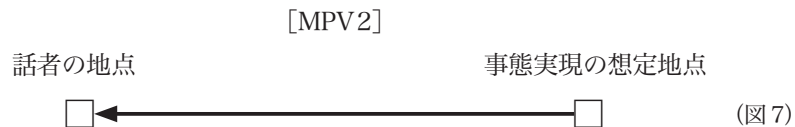
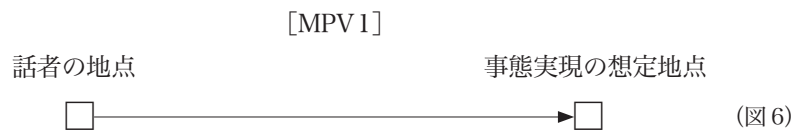
- ① 時間的に経過して、すでにその状態になるさまを表す語。
- ② 限定した数量を示す語を伴って、ある状況をさらにそれだけ続けよう、または、ある数量にさらにそれだけ加えようとする気持ちを表す語。
- ③ 間違いなくその状態であることを強めていう語。
- ④ （あとに打ち消しの語などを伴って）同じ事をこれ以上繰り返したくないという気持ちを強調する語。

上記の意味記述からは、時間要素の有無、数量の関与、主観的判断の関与等がばらばらに記述されており、「まだ」同様、多義性の様相が露わである。以下では、それぞれに該当する例文を挙げ（『現代副詞用語辞典』1994 東京堂出版より抜粋）、これらの意味の統一の説明を試みる。

- ① あっ、もうこんな時間だ。帰らなくちゃ。
- ② 「例のCD、いい加減で返せよ。」「もう一日だけ、な、な、いいだろう」
- ③ 昨日はそりゃもうものすごい雨でひどかった。
- ④ 足が痛くてもう歩けません。

まず、「もう」の一義となっている①「あっ、もうこんな時間だ。帰らなくちゃ。」の文例を用いて「もう」について考える。「まだ」と同様に「もう」も一見すると、参照点とターゲットの探求プロセスであるように思われる。しかし、たんにこの二者の関係であるのなら、①は「あっ、こんな時間だ。」というように「もう」を表す必要はない。「もう」という言語形式が付加されている以上、両者の関係に加えた何らかの言語主体の意識がはたらいっているのは当然である。その意識について考える。

参照点とターゲットの関係に、さらに別の意識が加えられているという意識構図は、先に述べた「まだ」と同一であり、このことから、「もう」でも、起点・経路・到達点スキーマがはたらいっていることが想定される。「まだ」との相違はスキーマ構成要素の指示する対象が異なる点にある。「もう」では、話者の地点を起点、事態実現の想定地点を到達点、両者を繋ぐメンタルパスを経路とするスキーマである。このスキーマが、メンタルパスのベクトル操作により二回作用する。まず一回目は起点から到達点に向かうベクトル作用である。これをMPV1とする(図6)。次いで、到達点から起点に向かうベクトル作用である。両者のベクトル作用は連鎖するものであり、MPV2で焦点化された経路が「もう」と言語化されている。



「もう」を動機づける上述のスキーマが実際にはたらく場合には、「まだ」と同様、MPV2を構成する三要素のどこが焦点化されるかによって様々な表現が可能となり、このことが多義の存在を可能にしている。「まだ」同様、経路の部分が焦点化されることは前提であり、

経路と同時に、(1) 話者の地点、(2) 事態実現の想定地点の二種類の焦点化が考えられる。その実際を順に見てみる。

(1) 話者の地点の焦点化

上に挙げた①から④の例文はすべて話者の地点からの焦点化をみせている。①を、例えば5時だと思っていた話者が、時計を見てみると6時だった時の発話としよう。目の前の時計が指している6時を見た瞬間に、6時を起点、想定していた5時を到達点、その間を繋ぐメンタルパスを経路とする起点・経路・到達点スキーマが起動する。まず、メンタルパスのベクトルは起点から到達点に向かう([MPV1])。そして、到達点である事態実現想定地点に到達し、想定事態を確認すると瞬時に、再びメンタルパスはベクトルの向きを変え、先の起点であった目の前の状況を指示する。その間のメンタルパスの移動経路の存在が「もう」、目の前の状況が「こんな時間だ」という断定表現で表される。

②では、話者の返却希望時点を起点、本来返す想定時点を到達点、その間のメンタルパスおよび時間経過を経路とする、起点・経路・到達点スキーマがはたらいっている。起点での話者の希望が焦点化され「いいだろう」と言語化されると同時に、経過の時間幅が「もう一日」と言語化されている。③では、話者が捉えた「昨日」の出来事「ものすごい雨が降る」の実現確定地点を起点、話者の想定する「雨が降る」事態を到達点、その間の程度差を経路とする、起点・経路・到達点スキーマがはたらいっており、話者の地点からの「ものすごい雨が降る」事態に対する評価が「ひどかった」と言語化されていると同時に、予想事態との程度差をあらわす「もう」が言語化されている。この場合の話者が捉えている成立事態は発話時点ではなく「きのう」とあるように過去の事態である。このように、話者の地点からの事態把握は発話時点とは限らない。④はたとえば、山登りの途中での発話と考えると、「山頂まで登る」事態の想定確定を到達点とし、「足が痛くて歩けない」とする現況が言語化されている。

このような、話者の地点の焦点化を示す言語形式が「もう」と共起する例は多く、かくれんぼの「もういいかい。」「まあだだよ。」「課長、できました。」「もうできたの。君は仕事が早いねえ。」などもその例である。かくれんぼの場合は相手がすでに隠れているという地点を想定した到達点、現在の状況を起点、その間のメンタルプロセスおよび時間経過を経路とするスキーマである。現在の状況を疑問形式で尋ねている。「もうできたの」では、完成を予想する地点を到達点、話者が実際に完成を知覚している地点を起点、その間のメンタルプロセスを経路とするスキーマである。

また、このような話者の地点の焦点化は、拡張され、間投詞として運用されることもある。たとえば、「待望の男の子が誕生したので、彼は、もう、嬉しくてたまらないらしいよ。」、またかぎっ子のマー君の発話、「マー君お留守番ね。」「また？ やだなあ、もう。」な

どである。「もう嬉しくてたまらない」では、男の子であれ、女の子であれ、子供が誕生することで嬉しいと感じる事態の予想地点を到達点、現在の「彼」の心境を起点、その間の嬉しさの程度を経路とするスキーマがはたらく。彼の心境に立脚した発話である「嬉しくてたまらない」が話者の視点から「らしいよ」で包まれて提示されている。マー君の発話では、母親の様子から予想される事態を到達点、「お留守番ね」という発話を聞いた瞬間の心境を起点とするスキーマである。この場合は、予想される事態が「留守番する」ことであったことが「また」から伺われる。

(2) 事態実現の想定地点の焦点化

事態実現の想定地点が焦点化される例としては⑤ ⑥ ⑦が挙げられる。

⑤ 駅ならもうすぐそこです。

⑥ もうまもなく暖かくなるでしょう。

⑦ 靴が片方しかないよ。もう片方知らない？

⑤ ⑥ ⑦の場合、実際にはたらくスキーマはMPV1のみである。起点である話者の地点から、到達点にメンタルパスを移動させる経路が「もう」で言語化されているのである。⑤では、話者の地点から到達点である「駅」までのメンタルパスの経路である距離が「もう」で言語化されており、⑥ではメンタルパスの経路である寒暖の差が「もう」で表されている。⑦の場合は、「片方しかない」現況から、「靴は両方あるもの」という本来の想定事態へのメンタルパスの経路が「もう」として言語化されているのである。

3-3 まとめ

言語主体による、認知的事態把握の観点から「まだ」「もう」の意味機能について考えてきた。「まだ」と「もう」の共通点は、両者がともに起点・経路・到達点スキーマによって動機づけられている言語表現であることにある。つまり、スキーマの種類としては同一のものなのである。そして、スキーマの構成要素の異なりがその差異が生じさせている。異なりの詳細を(表1)に示す。

	起点	経路	到達点	ベクトル	焦点化
まだ	事態実現想定地点	メンタルパス	事態実現確定地点	1: 起点→到達点 2: 到達点→話者地点	2回目のベクトル経路
もう	話者の地点	メンタルパス	事態実現想定地点	1: 起点→到達点 2: 到達点→起点	2回目 or 1回目のベクトル経路

(表1)

それぞれのスキーマがはたらく際の経路の焦点化が「まだ」「もう」では基本的な動機付

けとなっている。つまり、「まだ」「もう」の核となるはたらきはたんに経路が焦点化されていることを表すことにすぎない。しかし、スキーマが実動する際には、経路のみならず、他の二要素も焦点化される場合が多い。その場合には、「まだ」「もう」と共起する言語形式がその焦点化の部分を明示する。辞書の意味記述などから明らかなように、一般に「まだ」「もう」の振る舞いは多義的であるが、このような焦点化される部分の多様性が「まだ」「もう」の多義性を可能にしているのである。

4. 「ついに」「とうとう」

前節では、「まだ」「もう」が、認知モデルである起点・経路・到達点スキーマによって動機づけられた言語表現であることを見た。これまでの認知言語学の研究から、起点・経路・到達点スキーマの汎用性の高さが実証されていることは概観のところで述べた通りだが、ここでは、副詞表現「ついに」「とうとう」も、このスキーマによって動機づけられた言語表現であることを説明する。

4-1 起点・経路・到達点スキーマ

「ついに」と「とうとう」は文レベルで比較対照するかぎり交換可能なように見える。それは両者を動機づけるスキーマが、事態実現の想定地点を起点、事態実現の確定地点を到達点、その間のメンタルパスおよび時間経過を経路とする、全く同一の起点・経路・到達点スキーマであることによる。(図8)



「ついに」と「とうとう」は、同一のスキーマを反映しつつ、焦点化される部分の異なるのちがいによってその差異を生じさせている。そのため、文レベルを超えた文章レベルで捉えないかぎりその差異を見ることは困難である。ここでは、少し長くなるが、それぞれの例を文章レベルで比較対照することにより、「ついに」と「とうとう」のちがいを考える。

4-2 資料観察

ここでは、阿川弘之著『山本五十六 (上) (下)』(新潮社 2006)を資料にして「ついに」と「とうとう」の振る舞いを観察する。『山本五十六』は(上) 410 頁、(下) 335 頁の合計 745 頁から成る長編小説である。「作品後記」によれば、本稿が資料とした当該書は、「文

芸朝日」にノンフィクションの連載を依頼され、それに応えるかたちで書いたものを、その後の経緯から約三百枚加筆し、それを原型としてさらに加筆修正をしたものであるとされている。虚構世界を描いた小説とは異なり、史実に基づいた世界描出であることを特徴とする戦争という巨大な劇を扱った作品であり、第二次世界対戦の英雄的軍人の伝記である。作品中、「ついに」は17回、「とうとう」は16回現れる（【資料】参照）。それらを見ると、A：到達点の焦点化、B：主題と逸話の区別、C：会話文であるか否か、という三つの観点から顕著な相違があることが分かる。（表2）はそれらをまとめたものである。

	対照事項	ついに (/17)	とうとう (/16)
A	到達点の明示	1, 2, 3, 5, 9, 11, 13	
	否定形式と呼応	1, 4, 7, 9, 11, 14, 17	8, 9, 16
	否定的内容と呼応	2, 6, 12, 15,	4, 6,
B	主題に関与	1, 3, 6, 7, 8, 9, 10, 11, 12, 13, 14, 15, 16, 17	1, 2, 7, 12,
	逸話に関与	2, 4	3, 4, 5, 6, 8, 9, 10, 11, 13, 14, 15, 16
C	会話文内	6	1, 8, 9, 13, 15
	会話文に関与	7	7, 11, 12,

(表2)

まず、A項目について考える。「到達点の明示」は、「ついに」「とうとう」が到達点を明示する表現と共起しているかどうかを観察した結果である。「ついに」では5個に共起表現がある。[1（その後その死までついに）、2（六度目かに、ついに）、3（色々もめた末、ついに）、5（しつこく練習した末に、ついに）、9（ついに最後まで）、11（ついに一機も（無かった））、13（ついに一九四〇年の八月）] 一方、「とうとう」では共起表現は全く見られず、この点においては両者は明らかな対比を見せている。また、「否定形式と呼応」「否定的内容と呼応」でも両者の相違は明らかで、「ついに」が圧倒的に多い。

このような、到達点を明示する表現との共起が「ついに」に限られたものであること、また、話者の判断を明らかに表す否定形式および否定的内容と呼応も「ついに」には実に多く見られるという現象からは、「ついに」には、到達点の焦点化を意図する話者の意識が反映されていると見ることができる。一方、「とうとう」にそういった現象が見られないということからは、「とうとう」には到達点の焦点化を意図する話者の意識は反映されていないと考えることができる。

次いで、B項目である。この小説は実際の資料に基づいて書かれており、記録文学と呼ばれる分野に該当する。しかし、いくら資料に基づいて書かれたとはいえ、文学である以

上、それがたんに記録を目的としたものでないことは明らかである。また、筆者自身による作品後記にも、「『文芸朝日』連載中の題名は、『史伝山本五十六』であった。取材の途中から、私はこの仕事が面白くなった。調べれば調べるほど、軍紙とも聖将ともウォーモンガーともちがう山本五十六のイメージがはっきりして来た。真珠湾攻撃の立役者として世界に名高い提督だが、志操は米内さんや井上さんと全く同じ、ある意味で一番ハワイに行きたくなかったのは山本さんだったろうと思って、書きながら涙ぐむこともあった。」とあるように、筆者が描こうとしたのは、軍人としての山本五十六と、一個の普通の人間としての山本五十六である。一個の人間の両面の絡み合いを表すことにより人間味豊かな軍人山本五十六像をあらわそうとする筆者の企図であろう。

そのため、作品は、軍人としての山本に関わる出来事、いわゆる主題に沿った出来事と、それを脇から支える人間味深いエピソードとから成っている。前者を「主題に関与」、校舎を「逸話に関与」として区分した結果がBである。「ついに」、「とうとう」が現れる環境を両者の区分から見ると、ここでも大きな相違が見られる。「ついに」は圧倒的に「主題に関与」した出来事描写に多く現れ、「とうとう」は「逸話に関与」した出来事描写に多く現れている。

このような「主題に関与」、「逸話に関与」の相違は、会話文との関わりから考えたC項目に連関する。「会話文内」「会話文に関与」する表現としては、「ついに」は極めて少なく、他方「とうとう」は16例中8例にのぼる。そもそも小説における会話文の役割は、作中人物の声を際立たせることにより作品に臨場感をもたらすことにある。となれば当該テキストにおいては「会話文内」「会話文に関与」の出来事が同時に「逸話に関与」の出来事であることは当然といえよう。

以上、B、Cを統合すると、テキストにおける「ついに」、「とうとう」のはたらきの相違が見えてくる。テキストとは大きな塊を成す出来事群から成っており、当該テキストのような長編はいくつかの大きな塊の集合である。「ついに」は、ひとつの大きな塊を成す出来事群のなかでの出来事連鎖の流れ全体を射程にし、その流れのなかに、「ついに」が修飾する出来事を位置づけるはたらきをする。当該テキストでは、「ついに」はAで見たように、到達点を表す表現と共起するものが多い。これは、一つの塊を成す出来事群の終結を示すものである。それに対して、「とうとう」は、「とうとう」で修飾される出来事の周辺の出來事のみを関連出来事の射程とし、それらと一個の出来事の実現に至るまでの経緯との関係を表示する。テキスト全体を見据えた大局のなかでの事態を位置づける「ついに」と、部分をクローズアップして見せる「とうとう」の使い分けは、ある意味レトリカルなものだともいえるだろう。

4-3 「ついに」

4-3-1 事態連続の終局

4-2からは、「ついに」ではスキーマの到達点の部分が焦点化されていることが明らかである。このような到達点の焦点化は必ずしも、否定形式もしくは否定内容との共起を要求するものではないが、それらと共起する可能性の高いことは先の観察で見た通りである。そして、否定形式もしくは否定内容と共起した「ついに」の役割が、一つの出来事群の終結を述べることを目的とするものであることも先に述べた通りである。

4-3-2 エネルギー伝達

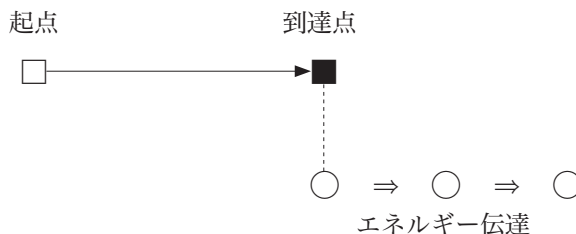
「ついに」が否定形式もしくは否定内容と共起しない場合も、もちろん多くある。共起しない場合には、焦点化された到達点はエネルギーを運び、次の事態を惹起するというエネルギー伝達の開始点となる。その実際を以下で説明する。

学生が山門に近づいたので、私は覚られぬために山門の東側へまわって窺った。托鉢僧の帰院の時刻であった。東の径から、連鉢の三人の一隊が、草鞋がけで蹠を雁行して来る。網代笠はみな手にかけている。坊へかえるまで托鉢の掟のまま、三四尺先をしか見ぬ目づかいで、お互いに私語を交わさず、ものしずかに私の前で右折して去った。

学生は山門のほとりでまだためらっていた。ついに彼は、柱の一つに身を凭せて、ポケットから、先ほど買った煙草をとりだした。あたりを落着きなく見まわした。きっと煙草にことよせて、火を起すのだろうと私は思った。果して彼はその一本を口にくわえ、顔を近づけて燐寸を擦った。

(三島由紀夫「金閣寺」)

ここでは、「煙草を取り出す」事態実現の想定時点を起点、「煙草を取り出す」事態実現の確定時点を到達点、その間のメンタルパスおよび時間経過を経路とする、起点・経路・到達点スキーマがはたらいっている。この箇所は「学生」が「火を起す」という事態の実動を開始するという、『金閣寺』の作品中重要な箇所であり、緊張感の高まるところである。「ためらって」いた「学生」が、「煙草を取り出す」事態が発端となり、「あたりを見まわす」、「燐寸を擦る」というように、動作から動作へとビリヤードのボールのようにエネルギーが伝達されていくのである(図9)。



(図9)

4-4 「とうとう」

到達点が焦点化される「ついに」に対して、「とうとう」は経路と到達点の両方の焦点化を反映する。スキーマの性格上、当然、到達点にも注意は向けられているのであるが、「とうとう」の場合には、到達点に到達するプロセスのほうが一層強く焦点化される。

三週間程経った。流行感冒も大分下火になった。三四百人の女工を使っている町の製糸工場では四人死んだというような噂が一段落ついた話として話されていた。私は気をゆるした。丁度上の離れ家の廻りに木を植える為にその頃毎日二三人植木屋がはいっていた。Yから貰った大きな藤の棚を作るのにも、少し日がかかった。私は毎日植える場所の指図や、或時は力業の手伝いなどで昼間は主に植木屋と一緒に暮していた。

そしてとうとう流行感冒に取り附かれた。植木屋からだった。私が寝た日から植木屋も皆来なくなった。四十度近い熱は覚えて初めてだった。腰や足が無闇とだるくて閉口した。然し一日苦しんで、翌日になったら非常によくなった。ところが今度は妻に伝染した。

(志賀直哉「流行性感冒」)

ここでの「とうとう」は、「流行性感冒に取り附かれる」事態の実現確定時点を起点、「流行感冒に取り附かれる」事態の実現確定時点を到達点、その間の時間経過を経路とする、起点・経路・到達点スキーマに動機づけられている。起点から到達点までの経路は、「私は気をゆるした。」から「……植木屋と一緒にいた。」までの三文によって表されており、描写の丁寧さが経路の焦点化を示している。

また、この場合の「とうとう」は、「そしてとうとう流行性感冒に取り附かれた。」までを見る限りでは、先に述べた描写の冗長さが気にはなるものの、「ついに」に置き換えてもそれ程違和感はない。しかし、後続する文章との関わりからみると、「ついに」に置き換えると座りが悪い。これは、先の「ついに」のところで述べたように、「ついに」からは新たなエネルギー伝達が始まらなければならないのだが、その後の文章が「植木屋からだった」などというように静的描写の連続となっていることによるものである。このことから、「とうとう」では、「ついに」とは異なり、「とうとう」が修飾する事態にエネルギー伝達を要求しないことが明らかである。

4-5 まとめ

同一のスキーマを動機づけにし、焦点化の部分だけが異なるという言語形式のため、「ついに」と「とうとう」の相違を見るのはなかなか困難であるが、テキストという大きな範囲を射程にするといくつかの相違点が見えてくる。

「ついに」は、否定形式、否定的内容と共に起るか否かで、事態の連鎖を終局とするか、

事態の連鎖を開始するかという全く反対のはたらきをするように見える。しかし、一見すると真反対に見えるこのはたらきも、エネルギー伝達という観点から捉えれば統一した説明が可能となる。つまり、「ついに」を動機づけているスキーマは、事態実現の想定地点を起点、事態実現の確定地点を到達点、その間のメンタルパスおよび時間経過を経路とする、起点・経路・到達点スキーマであり、到達点が焦点化されているのである。そして、このスキーマが実働すると、本来のスキーマに加えて付随したはたらきが見えてくる。

肯定表現と共起すると、到達点が焦点化されることにより、その事態は事態が事態を惹起するエネルギーを運び、事態連鎖の始まりを示す役目を果たす。しかし、このようなエネルギー伝達も、否定形式、否定的内容と共にすればその効力を発揮することはできない。というよりは、備えたエネルギーが否定により抑えられてしまうことにより、たんに否定の形式や内容が持つ否定力以上の強い否定概念が際立つこととなる。他方こういったエネルギー付加とは関与しない「とうとう」では、ただたんたん経路のみが焦点化されることになる。隣接する意味機能を有する言語形式は、つねに棲み分けが要求される。「ついに」と「とうとう」は同じスキーマながら、焦点化の部分を変え、上述のような棲み分けているといえよう。

5. むすびにかえて

従来の言語研究では、研究対象とりにくいと考えられている副詞表現のうち、「まだ」「もう」「ついに」「とうとう」を取り上げ、言語主体の認知的観点から考察を試み、四者とも、これまでの認知言語学の研究成果から、汎用性が高く基本的な認知モデルとみなされている、起点・経路・到達点スキーマに動機づけられていることを説明した。同質のスキーマに動機づけられながら、それぞれの言語形式の見せる意味機能の異なりは、スキーマ自体のはたらき方の異なり、また、スキーマ構成要素のそれぞれが指示する対象や、焦点化される部分の異なりを反映したものである。同質のスキーマで説明可能と考えられる副詞表現はまだ多い。今後の課題としたい。

【資料】(阿川弘之『山本五十六(上)(下)』(新潮文庫2006))

[ついに]

1. ともかくしかし、小さな一つの可能性はこうして消え、山本は海へ出て、その後その死までついに石原莞爾に会うことは無かった。(上p.14)
2. 山本は何度でも言ってくる。六度目に、ついに社長の方が折れてその青年を採用したということ

があった。(上p.103)

3. 試油というのは、井戸をあけて溜まっていた石油を汲み出し、そのあとがどうなるか油の量を試験してみることである。色々もめた末、ついにタミスロン一号井の試油が行われることになり、口をあけるとガスと油が初めは勢いよく噴出して来たが、……(上p.301)
4. こうして「書き人知らず」の「壇之浦夜合戦記」は、みちの許から持去られ、そのあと、彼女が何度催促しても還してもらえず、借りて行った松村は昭和十六年の四月に亡くなり、みちは口惜しがってずいぶん調べたが、ついに行方が分らなくなってしまった。(上p.325)
5. 山本はそれを知らないから、ひどく口惜しがり、しつこく練習した末に、ついに、谷村も出来ない、穴の小さい方の十銭玉に火のついたマッチを通すことに成功してしまった。(上p.326)
6. それより前、枢密院の本会議にこの条約が諮詢された時、顧問官の石井菊次郎は、「ドイツ国或はその前身たるプロシヤ国と同盟を結んだ国で、その同盟により利益を受けたもののないことは顕著な事実である。のみならず、これがため不慮の災難を蒙り、ついに社稷を失うに至った国すらある。(上p.381)
7. 東条内閣の海相になった嶋田繁太郎は、自身の地位を脅やかされるのを嫌ってか、「今、聯合艦隊の長官には、山本以外に人が無い」の一点張りで、ついに承知しなかった。(下p.12)
8. そして、南雲長官以下、賽がついに予定通り投げられたことを知った。(下p.77)
9. 場合によって平文の使用を許したアメリカ軍の暗号が、ついに最後まで日本側に解読不可能で、律義に一切を暗号化していた日本の作戦電報が、のちに相当部分アメリカに解かれてしまったのは、ずいぶん皮肉なことで……(下p.104)
10. 八日の東京放送は、レコード音楽の時間に、ベートーベンの交響曲「運命」を演奏し、荷風のような人には、聞いて耳を洗いたい思いのする言葉であったかも知れないが、「帝国海軍ついに立つ」、「帝国海軍ついに立つ」と、何度となく繰返した。(下p.108)
11. もし戦闘機に出あったら百年目だと淵田は思っていたが、舞い上って来る戦闘機は、ついに一機も無かった(下p.110)
12. こうして来栖の意図はついに空しくなったが、ルーズベルトやハルの指摘したポイント、ポイントは、山本が次官時代から、米内と共に一貫して主張しつづけたところと、ほとんど完全に一致しているのは、興味のあることであろう。(下p.126)
13. 約一年半の「血のにじむような苦闘」の末に、彼らはついに一九四〇年(昭和十五年)の八月、紙と鉛筆、想像と推理だけで「九七式欧文印字機」の模造品第一号を作り上げることに成功したという(下p.133)
14. 飛行隊長の淵田は、出撃の前から腹痛を訴えていたが、盲腸炎ときまり、航海中の艦内で手術を受け、戦闘にはついに参加することが出来なかった(下p.198)
15. ミッドウェーさして急航中の「大和」の上で、最後に「飛龍」もやられたことを知った時、山本はついに作戦の中止を決意し、幕僚に退却命令を書くことを命じた。(下p.213)
16. 十二月十二日には、天皇陛下の伊勢神宮御親拝ということがあった。天皇の心中は忸度する由が無いが、戦争を防ぐことが出来ず、ついにこういう事態になって来たことを告げに行かれたものと考えていいであろう(下p.240)
17. ランフィヤーはラ・ホイヤのゴルフ・クラブのメンバーで、必ず行くという約束であったが、待てど暮せどついにあらわれなかったというのである(下p.310)

[とうとう]

1. 「長岡人士の七十年來の願望が実現した喜びに満身の血が熱しうずいて来る」「世の中が変った。長岡が変った。日本が変った」「月が明るい。山本閣下が司令長官だ。長岡が急に明るくなった。日本が明るくなるのだ」と、手放しの感激ぶりであるから、果して山本がこの通りの調子でものを言ったかどうかは分らない。「長岡藩からも、とうとう聯合艦隊の司令長官が出たじゃないか。君、覚えておいてくれよ」(上p.35)
2. しかし、岩村監軍は、それをきき入れようとせず、「言を左右にして戦機を延ばし、その間に戦備を調えるつもりであろう。降るか戦うか、返答は一つだ」と言って、席を蹴って立ってしまった。そのため、長岡藩はとうとう決戦を強いられることになり、やがて河井は重傷を負うて起つことが出来なくなる、代って山本帯刀が長岡藩総司令官になったが、その帯刀も官軍に捕えられ、降伏を肯んぜず斬られる、ということになった。(上p.59)
3. 何と言われても彼女は、「お願いします」の一点張りで、とうとう一念通し(上p.114)
4. というわけで、新井は退役後細君と別れ、浜吉に養われていたが、浜吉の方は座敷があるから夜がおそく、やがてお定りの痴話喧嘩がはじまる、浜吉の母親とも折合いが悪くなり、とうとう芸妓の家を追出され、しばらく炭屋商売をやっていたが、その後杳として消息が知れなくなった。(上p.170)
5. ……連中」にしてみれば、航空の人々もとうとう頭へ来たのかという思いであつたろう(上p.214)
6. ……吉例? そんなものは吉例じゃなくて悪例だ」と言う。松本賛吉はとうとう旗を捲いて引下ることにしたが、海軍省の建物を出ながら、どうもえらく馬力のド強いのが新次官になって来たなと思ったそうである。(上p.227)
7. この時井上は、遺書をしたためた上で、改正案反対を唱えつづけたが、何カ月か経って、とうとう軍務局長の寺島健が中に立ち、「こんな馬鹿な案によって、制度改正をやったという非難は局長自ら受けるから……(上p.249)
8. ドイツ人は何でも経済原論の第一章から説き始めるから嫌いです。私はドイツにもいましたが、とうとうドイツ語を覚えませんでした。(上p.277)
9. 「そりゃ、どこで騙されたのか分らないが、とにかく騙されてると思ったから、やめたんです。だけど、嘘とは思いますが、私も立会った森田貫一も、どこが嘘かは、とうとう分らなかった」と答えた。(上p.291)
10. いやがっていた憲兵も、そのうちとうとうつくことになった。「俺の首に十万円かかっているそうだよ」と、山本は人ごとのような口ぶりで古川敏子に話したりした(上p.319)
11. と、真情をおもてにあらわして言い、とうとう草鹿も折れて、「分りました。今後反対論は一切申し上げません。長官のお考えの実現に努めます」と答えることになった。(下p.46)
12. 山本は真ッ向から反対し、桂陸相大山参謀総長との間で、取り消せ、取り消せないともめた末、とうとう、「海軍は、素姓の怪しい武装員を乗せた船が、海上を彷徨しているのを認めた場合、海賊船としてこれを撃沈することがある。(下p.52)
13. ……どうした」と、堀悌吉は声をかけた。「とうとう決ったよ。あちらは、二十六日に飛んだそうだ」山本は答えた(下p.78)
14. 千代子は、三月の中旬から肋膜炎を患い、病状が重く、ドゥーリットルの東京空襲のころは、一時医者にも見はなされたほどで、未だ絶対安静の状態がつづいていたが、とうとう意を決し、死んでもいいというつもりで、その晩、抱きかかえられるようにして、下関行の夜汽車に乗せてもらった(下p.194)

15. オイ、君とは当分お別れだ。一戦やろう」と将棋をいどみ、二勝一敗で彼が勝ったあと、藤井が、「とうとう、長官、最前線へ出られることになりましたなア」と言う、(下p.250)
16. 山本が「ケツから煙が出るほど」煙草を「喫んでやる」時は、とうとう来ないで終わった。(下p.325)

【注】

- 1) 両者の関係は、連鎖して作動することから時間関係として捉えれば、前後に発生するスキーマということになるが、認知的観点からいえば図と地の関係となる。
- 2) 山本 (2005) 参照。

【参考文献】

- Johnson, M. 1987. *The Body in the Mind—The Bodily Basis of Meaning, Imagination, and Reason*. Univ. of Chicago Press.
- Lakoff, G. and M. Johnson. 1999. *Philosophy in the Flesh*. Basic Books.
- Langacker, Ronald W. 1991. *Foundations of Cognitive Grammar II*. Stanford University Press.
- Langacker, Ronald W. 2000. *Grammar and Conceptualization*. Mouton de Gruyter
- 森田良行. 1983. 『基礎日本語 1』角川書店
- 山梨正明. 1995. 『認知文法論』ひつじ書房
- 山梨正明. 2000. 『認知言語学原理』くろしお出版
- 山本雅子. 2005. 「テイル形式の認知的意味」『言語と文化』第 12 号, 愛知大学語学教育研究室